

POLAND MONTHLY / BIULETYN POLSKI

1984年

11月号

(通巻32号)

400円

ポーランド月報

sierpień
1980



sierpień
1984



RKW TORUŃ

フラシニユクとピニオルの逮捕について……………2
 Z・ブヤク

「連帯」4周年を迎えて
 暫定調整委員会声明……………3
 各種労働組合共同声明……………3
 ワルシャワで グダンスクで 全国各地で ……4

恩赦その後——指導者は語る
 「この恩赦は何も解決しない」……………6
 K・モゼレフスキ

ポーランドの自由と世界平和／平和に関心
 をもつ全世界人民へ J・クーロン……………7
 これまでのこと これからのこと……………8
 A・グヴィアズダ

神話にとらわれるな KOS……………11

ジャーナリストは それでも語らんとす
 解説にかえて 工藤幸雄……………12
 ぼく抜きで 投票所へ足を向けない
 5つの理由 S・プラトコフスキ……………14
 クローズアップ——ニュースの裏側……………16
 D・P=ジュヴィンスカ

1984年夏ポーランド訪問記
 ポーランドでの「出会い」 家本博一……………20
 人それぞれ 街それぞれ——ワルシャワ、
 プラハ、ブダペスト探訪記 星洋子……………24
 ポーランド日誌 1984年8月28日—10月4日…26

W・フラシニユクとJ・ピニオルの逮捕について

sur l'arrestation de W. Frasnyniuk et J. Pinior, par Z. Bujak

【バリ「連帯」通信注】ヴワディスワフ・フラシニユクとユゼフ・ピニオルが「公共秩序の擾乱」を理由に2カ月の禁固刑を科された。裁判は略式手続に従って行われたが、これは1980年ストと8月合意の4周年期間中、ヴロツワフ市長により制定された非常措置に基づくものである。8月31日の午後1時30分頃、フラシニユクとピニオルは1980年8月に地方ストライキ委員会本部が置かれていたグラビシンスカ通りのバス車庫に赴いた。ここで2人は記念銘板に花を捧げて、フラシニユクが群衆に演説し、その直後、2人は逮捕された。

「連帯」記念日の当日、ドシロンスク地方「連帯」指導者のヴワディスワフ・フラシニユクとユゼフ・ピニオルの2人がふたたび逮捕された。これは政治的にきわめて重大な意味をもつ事件である。2人の逮捕時の状況はこれが事前に十分準備された措置であったことを思わせる。

この2人の中心的組合活動家にとって、恩赦とは最初の投獄と次の投獄の間の1カ月の中断期間にすぎなかった。これは不安が実証された具体例であった。恩赦は社会に対する闘争の路線に何の変化ももたらさなかった。何人かの道徳的、政治的権威者が恩赦を機に示したポーランド政府に対するきわめて

好意的な反応とそして組合活動家（ボグダン・リスを含む）すべての釈放を求めるきわめて控え目な要求を、疑いもなく政府当局は、社会の側の弱さの証明と、その後の新たな逮捕に対する暗黙の支持の約束ととったのだ。

ポーランド人民共和国政府が同時に国外追放罪を定めた法律の制定計画を発表したのも決して偶然のことではない。市民的権利に対するこの途方もない攻撃は、ポーランドの尊厳に対して加えられた文字通りの平手打ちであり、われわれから共通の祖国を奪おうとする試みのひとつである。

暫定調整委員会はポーランドと外国にある「連帯」の友人たちすべてが、ポーランド人民共和国政府の最近の決定から結論を引き出すよう期待したい。

そしてここポーランドでわれわれは、ヴワディスワフ・フラシニユクとユゼフ・ピニオルの投獄の2カ月間を権力にとってとりわけ不愉快な期間と化さなければならない。この期間中、「連帯」全組織が投獄者の防衛のため積極的に行動しなければならない。「連帯」活動家に対する弾圧が得にならないことを当局に示してやろう。

1984年9月6日

ズビグニェフ・ブヤク

[Bulletin d'Information, No. 96, 1984. 9. 19]

訳：水谷 職

「連帯」4周年を迎えて

The Fourth Anniversary of "Solidarność"

暫定調整委員会声明

TKK Statement, 1984.8.17

4年前、バルト海沿岸造船所労働者を先頭にしてストライキにたったポーランドの労働者は「連帯」の結成を政府当局に認めさせた。8月の協定に署名することによって政府はポーランドにおける独立自治労働組合の存在を承認しなければならなかった。

「連帯」は自らを組織しつつあった国民の努力の成果であった。それはたちまちのうちにポーランドの労働者の圧倒的多数を代表するものとなった。12月13日のクーデターにもかかわらず、それは工場や各職業分野に常に存在を続け、その思想は広く国民に支持されてきた。法の侵犯に対する3年近くにわたる闘争は「連帯」をむしろ強化し、警察の弾圧に対するその抵抗力をかえって強めた。

仲間たちの大半が釈放された後の今日、組合はまず何よりも公然たる活動の権利を獲得しなければならない。それはILO諸条約と8月協定によって保証されたものだ。ポーランドの権力を握る全集団に対しこの協定の順守を要求する。「連帯」を合法化する労働組合の複数制はポーランドが危機から脱出するための必要不可欠の条件である。それゆえに重ねて主張するが、「連帯」の存在はいかなるものであれ絶対に交渉の対象とはならない。「連帯」は社会全体のものである。将来における「連帯」の運命はわれわれ自身とわれわれが闘いの中で獲得するものにかかっている。

8月31日が、「連帯」の記念日がやってくようとしている。この日われわれは、独立した正義のポーランドを求めて闘うわれわれの意志を、「連帯」を強化しようとするわれわれの決意を、そしてすべての政治的防衛を断絶するわれわれの決心を示すであろう。

すべての組合組織に対し「連帯」記念日を祝う

よう呼びかける。組合員すべてと組合支持者のすべてが多数これに参加するよう訴える。

1984年8月17日

独立自治労働組合「連帯」暫定調整委員会

ズビグニェフ・ブヤク (マゾフシェ)

ボグダン・ボルセヴィチ (グダンスク)

タデアウシ・イエディナク (シロンスコ・ドナルプ)

マレク・ムシンスキ (ドシロンスク)

エウゲニウシ・シュメイコ (全国委員)

オブザーバー参加: マウヨ・ポルスカ、ビドゴシチ、トルン各地方「連帯」代表

[Bulletin d' Information No.96, 1984.9.19]

訳: 水谷 駿

各種労働組合共同声明

For the Restoration of Trade Union Rights

危機克服のためのより一層の社会的活動と国民的和解を訴えた政府当局側からの呼びかけ——これはわが国の状況の困難さを反映している——に答えてわれわれは以下のとおり声明する。

- 1 社会的参加を促進する唯一の方法は社会的組織を通じることである。
- 2 ポーランドの状況下ではそのような組織は主として労働組合である。
- 3 労働組合が社会的、経済的諸問題の解決に効果的に寄与できるためには、それは本物でなければならない、自由に結成されなければならない、自由に活動できなければならない。

ポーランド人民共和国憲法第84条およびポーランドが批准したILO諸条約、そして8月協定に基づき、われわれはポーランド人民共和国政府各機関に対し労働組合の権利と自由の即時回復をあらためて要求する。

1980年8月以降に活動した各労働組合指導部の

1員としてわれわれは、労働組合の権利回復のために働くことがわれわれを選んだ組合員に対するわれわれの任務であり義務であることを確認して以下に署名する。

1984年8月31日

ボグダン・フィウトフスキ (1981年11月以降コンピューター科学者自立労働組合連合作業委員会委員長)

アントニ・ウォパタ (1981年6月以降ポーランド教員組合委員長)

アンジェイ・マラノフスキ (ポーランド教員組合)

アルビン・メルツェル (1980年10月以降建設産業・建設協同組合従業員産別組合書記)

ヤツェク・マルケル (1981年10月以降「連帯」全国委員会幹部会員)

スタニスワフ・ルシネク (「連帯」)

ヤン・シモン (1981年1月以降金属労働者産別組合書記)

ヤン・トリニコフスキ (1981年6月以降ポーランド教員組合中央評議会書記)

レフ・ワレサ (「連帯」委員長)

スタニスワフ・ウォンドウォフスキ (1981年10月以降「連帯」副委員長)

ミハウ・ジュラフスキ (1981年11月以降自立労働組合連合作業委員会委員、1980年11月以降酪農産業従業員自立組合委員長)

X (判読不能)

[Uncensored Poland News Bulletin, No. 18/
84, 1984. 9. 20. 訳: 水谷 颯]

ワルシャワで グダンスクで 全国各地で

at Warsaw, Gdańsk and everywhere

ワルシャワ 大聖堂での夕方のミサに参加した人人が「ソリダルノシチ」のスローガンを叫びながら広場に出て来る。旧王宮の復旧を記念して公式行事が行われていた王宮前広場の入口は警官隊によって封鎖されていた。騎馬警官によって解散させられた人々は新世界通りとクラコフスキエ・ブシェドミエシチエ通りの方へと流れて行った。9月3日付で発表された「連帯」ワルシャワ地方執行委員会の声明によれば、ワルシャワの自動車工場、フタ・ワルシャワ製鉄所、ウルス・トラクター工場、ZWARZ、Rawar, Polkolor, Budopol その他の工場で、15分間のストライキや構内デモ、赤と白の花の献花、「連帯」スローガンの落書、政治囚釈放要求の署名活動、ピラの配布などの行動が展開されたという。

ワルシャワ地方「連帯」結成4周年にあたる9月6日、聖スタニスワフ・コストカ教会でのミサのあと、とくにこの日のために録音されたZ・ブヤクの演説が放送される。「……心の中で連帯するだけでは足りない。工場の中でも連帯しよう」。

グダンスク 8月4周年の祝賀行動は8月26日から始まった。ドミニコ教会その他各地の教会でコ

ンサートや演劇、展覧会などさまざまな催しが開かれ、全国から有名な俳優、歌手、演奏家、画家たちが参加、労働者、市民を楽しませた。8月31日、レフ・ワレサはレーニン造船所前の70年事件記念碑に献花。周囲は警官と治安機関員だけだったために当初予定していた演説〔全文は本誌10月号20～21頁〕はとりやめる。ドミニコ教会ではヤツェク・フェドロヴィチの司会でコンサートが開かれ、A・ミフニク、J・オニシケヴィチも参加。最後に全員が1980年8月の21項目要求を読みあげてコンサートは終る。聖ブリギッダ教会ではワレサ委員長も参加して造船所労働者のためのミサ。

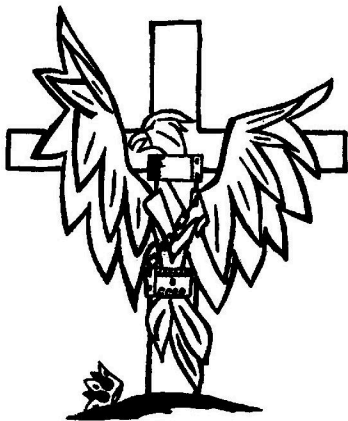
ヴロツワフ 「連帯」ヴロツワフ地方執行委員会は、8月30日にブイヴィダ教会、8月31日に大聖堂で開催されるミサに市民が多数参集し、ミサ終了後、赤の広場からフェリクス・ジュリンスキ通りまでデモをするよう呼びかけていた(事前に大衆のデモが呼びかけられていたのは今年はヴロツワフだけであった)。8月30日、政治囚のためのミサ後、数千人の群衆がブイヴィダ教会を出て聖歌を歌いながらピアストフスカ通りに向けて行進する。警官隊がこれを包囲し、繰り返し検問を行う。

8月31日、「連帯」委員会がデモを呼びかけていた道筋沿いはZOMOによって嚴重に封鎖された。集まった市民労働者はデモの隊列を作ったがZOMOにより解散させられる。市場の広場で2000余の群衆が「ソリダルノシチノ」のスローガンを叫ぶ。祖国のために祈る大聖堂でのミサには非常に多数が参加、ミサ後2000~3000人がジェルジンスキ広場へと向かい、ここでZOMOにより解散させられる。夕方にかけて各地で小競り合いと検問が繰り返される。30、31の両日、あわせて200余名が警察の尋問を受け、14名が逮捕された。逮捕者の中には1カ月前に釈放されたばかりで、当局から繰返し警告を受けていたW・フラシニェクとJ・ピニョルの2人が含まれていた〔本誌2頁を参照〕。

ノヴァフタ 8月30日、レーニン製鉄所内に多数のピラヤステッカーが現われる。8月31日、製鉄所「連帯」委員会の呼びかけに応え、圧延工場を中心に各所に「ソリダルノシチ」の飾りが。30日から31日にかけての夜、ノヴァフタで17名が検問を受け、多数が尋問される。30、31の両日、8月4周年を記念して各教会でミサが開かれる。31日、ミシチシェヨヴィツェの教会ではイエジ・ポビエウシコ神父が説教、恩赦で釈放された「連帯」活動家多数が参加する。アルカ教会には500~600人が集まり、教会の前に「連帯」旗を掲げ、ピラをまく。デモをノの声があがったが、人々は「連帯」委員会の事前の呼びかけに従い、ボグダン・ヴロスキが死体で見つかった場所（製鉄所近く）までしか行進しなかった。ここで花を捧げ、スローガンを唱和し、歌を歌って解散。比較的警備が手薄だった市街地では夜遅くまで多数のグループが通りをねり歩いた。

シチェチン シチェチン協定締結記念日である8月30日、釈放されたばかりのM・ユルチクが70年事件記念碑と「連帯」活動家の墓に献花。数千人を集めて開かれた夕方のミサ後、人々はユルチクに拍手喝采を送る。彼が立ち去ったのち、ZOMOの部隊が群衆を解散させ、各所で検問を実施。

ボズナン 1956年6月事件記念碑の回りに人々が黙りこくって集まる。その10分後、ミツキェヴィ



ポーランドを象徴する白鳩がはりつけになっている。足かせにはロシア語で「ソ連製」の文字。

チ広場はZOMOによって封鎖された。ドミニコ教会でミサを終えた人々は広場に入ろうとしたが、ZOMOの隊列を前にして解散しようとする。その瞬間、ZOMOが襲いかかり、逃げまどう人々の叫びげ声が護送車にこだました。しかし逮捕者はでなかった。ミサには、検察庁から出頭命令の出ていたヤヌシ・パウビツキも参加。

スワブスク 4年前、農業機械工場のストが始まった8月25日、1部局の労働者が5分間、仕事の手を止めた。8月30日と31日、当局は「連帯」活動家たちを48時間監視下に置き、家宅捜索を行った。31日、聖マリア教会でのミサ後、人々は「連帯」記念碑の前で花の十字架を作り、ロウソクに火をともした。大量のZOMOや治安機関員にとり囲まれながらもすべては静かに行進した。

ラドム 大聖堂でのミサ後約2000人が1956年6月事件記念碑の回りに集まって献花し、国歌を歌う。ZOMOは介入せず、人々は静かに解散。

[Bulletin d'Information, No. 96, 84.9.19, No 97, 84.10.3より 訳: 水谷 駿]

恩赦その後——指導者は語る

After Amnesty——Leaders speak out

【編集部より】 7月21日の恩赦以来3ヵ月、「連帯」は新たな状況下で今後進むべき道をいまだ模索しているように見える。釈放された指導者たちも目立った発言をしている例は少ない。しかし各人がそれなりに現状を把握し今後の展望を立てようと努力しているようである。今号では、釈放幹部のうち3人の発言とKOSの主張を紹介する。

「この恩赦は何も解決しない」

1984年8月7日 カロル・モゼレフスキ

拘留期限が切れた時、当局はわれわれを引き続き獄中に留めおくために、暴力により体制転覆を試みたとして刑法123条に基きわれわれを起訴した。実際この起訴は1981年12月13日以前の「連帯」の運営における疑問の余地なく合法的な活動を問題としたものだった。まったくのでっち上げであったにもかかわらず、この起訴はわれわれに対し裁判もなしの2年半にわたる投獄を強いた。恩赦によるわれわれの釈放は、この起訴が偽りであり、われわれの投獄が正当化されえないことを法廷で証明する可能性をわれわれから奪った。したがってわれわれの場合この恩赦は、証拠も裁判もなしに長年の投獄をもたらした紛うかたなき不法行為を人道主義の見せかけの下に蔽い隠すことである。われわれに異議申し立ての手續は一切認めない恩赦法は、自らの権利のため闘う可能性をわれわれから奪い取った。

だがこれはわれわれの個人的な問題である。650余名の政治囚に対し恩赦が自由の扉を開いたこの時にあたり、このことに過度の政治的重要性を付与しようとは思わない。今日ポーランドを切り裂いている社会的対立を解決しようとするいかなる試みにとっても、全面恩赦が必要な前提条件であることは疑いえない。当然ながら、この最初のステップは、次のステップが続かない限りそれ自体としては何の解決策にもなりえない。政治囚は社会的対立の原因でもなければ、これを作り出した者でもない。

1981年以降ポーランドの監獄を一杯にしてきたのはこの恒常的な社会的対立である。その原因は

明白である。「連帯」の非合法化——このためにそれは地下活動に追いやられたが、しかし当局はついにその解体に成功しなかった。基本的法令に対する侵犯。戒厳法および1983年夏に制定された諸法の効力の継続。政治的現実主義が語られる時、それはしばしば、国家の存立のため当局は社会の要求を満たそうとしても満たしえないことを意味するとされる。しかし、ポーランドの「体制派」にとつての現実とともに、ポーランド社会の抑えることのできない希求とその活動によって作り出された現実もまた存在することを阻に銘じなければならぬ。現在の政治的危機に対する解決策が存在するとすれば、それはこのいずれの現実をも無視するものであってはならない。

加えて、今回の恩赦は全面的なものではない。叛逆罪（刑法第122条）に問われているとして恩赦の適用を除外されたボグダン・リスとその助手ビョトル・ミェジェフスキの件の決定的重要性が強調されなければならない。それは1982年にわれわれに対して用いられた方法と非常によく似ている。あの時は1981年12月13日に施行された戒厳法の撤廃にもかかわらず、刑法第123条に基く偽瞞的起訴によってわれわれを獄中にとどめおくことが可能になった。これは重要度においていささかも劣らない、あるいは実際もつと重要な「11人」のケースに似た問題である。

リスとミェジェフスキが近く釈放されないとすれば、それはこれまでのどれよりもはるかに危険な反組合の弾圧の新しい波に道を開くものとなるだろう。スターリン時代に反ナチス抵抗運動の開



K・モゼレフスキ

士たちを相手に裏切りの名で演出された裁判をわれわれは今なお覚えている。この公式が今日組合の抵抗運動の活動家たちに対して適用されるならば、それは今度の恩赦からその積極的な政治的意味あいのすべてを取り去ってしまうだろう。事実、それは最も危険な後退の1歩となる。

最後に今回の恩赦は警察署の外で爆発を生じさせた罪に問われているルビンとヴォジスワフの鉦夫グループには適用されていない。抗議のこのよ

うな形態は拒否されるべきであるとしても、それにもかかわらず強調されるべきは、問題の事件が人命を危険にさらすような性格のものではなかったこと、そして鉦夫たちが殺された1982年8月31日の銃撃のあとにルビンで起こったことである。恩赦が政治的解決のあらゆる試みにとって絶対不可欠な緊張緩和の雰囲気を作り出しうするためには、それは全面的でなければならず、投獄されている鉦夫たちの問題が解決されなければならない。

政府が一方の手で与えたものを他方の手で奪い取るかぎり、恩赦がポーランドにおける状況の永続的改善に寄与することはありえない。事実、大幅な事態の悪化もありえないわけではない。何もまだ完結していない。それゆえにこそ、西側も含めた世論は、欺されることのないよう、この恩赦を細心の注意と慎重さをもって見守らなければならないのである。

[Uncensored Poland News Bulletin,
No.18/84, 1984.9.20 訳:水谷 駿]

ポーランドの自由と世界平和

1984年8月9日
ヤツェク・クーロン

私はこれまで9回か10回監獄から解放されているが、釈放のたびに恐るべきショックを感じる。あわせて私は9年間を獄中で過ごした。ショック状態のまま政治について語るのはきわめて危険である。それに私はこの3年間孤立状態で過ごしてきた。だから今すぐ政治について語るのは無邪気すぎるだろう。政治について私が語れることは囚人としての考えに限定される。この囚人としての考えを私はこの5月、全世界の平和に関心を持つ人々へのアピールの中で述べた。私の最も深い確信はこうである。ポーランドの自由は世界平和の問題と不可分である、と。これが政治について私に言うべきすべてであり、これは囚人の考えであることを強調しておきたい。恩赦に関しては何も言うことはできない。それは政治的行為であり、今述べたように政治的発言はしたくないからだ。われわれについて言えばこの恩赦は無法行為である。それは拘留に始まり、逮捕、根拠のない起訴、何

の証拠もない裁判の準備と続いた無法行為にさらに新たな無法行為を追加するものである。そしてあの脅迫行為、政治的活動はしないという誓約と引き換えにわれわれに一時的海外移住ないし釈放が提案された時にわれわれに対し用いられたあのギャング式の脅迫行為。最後に、裁判を強制された時、私は裁判の開始を求めてハンストを行ったが、その結果、何も要求しないのに恩赦が適用された。私に言えることは以上である。

[Uncensored Poland News Bulletin,
No.16/84, 1984.8.16 訳:水谷 駿]

平和に関心を持つ全世界人民へ

1984年5月
ヤツェク・クーロン

ポーランド政府は力によって社会から市民権を奪い、国の経済を破壊しつつある。前代未聞の結果を伴う経済の崩壊の可能性が現実化しようとしている。

社会は白らの組織、「連帯」の解体を許さない。社会は白らの権利を守り、政府に抵抗することが

できる。しかしそれはソ連の介入を招きかねず、そうならば国民的破局が不可避であり、世界的破局さえ生じかねない。

1981年12月13日以来ポーランド社会は戦争の重圧下に置かれている。ポーランド人のみが自らの国家と世界平和の命運に対し責任を負い続けている。彼らは今日、驚嘆に値する忍耐力を発揮して世界の平和を維持している。

世界の平和運動は、ポーランド人を運命のなすがままに委ねるならば、自身の原則に反して行動することになる。ワルシャワ条約軍がいついかなる時にも自らの社会を相手に戦争を遂行できる状

況を除去しないかぎり、平和は不可能である。

このゆえに、東ドイツとポーランドを含む中央ヨーロッパの非武装化が絶対に必要である。

平和に関心をもつ世界の全人民に訴える。平和を求める聞いは、巡航ミサイルとパーシングミサイルが配備されつつあるNATOの基地でだけ進めればよいというものではない。

世界の平和運動には、東ヨーロッパの萌芽的な反戦運動と、1981年12月13日以降の軍事独裁に反対するポーランド社会の平和的闘争を支持する道義的義務がある。

(op.cit. 訳:水谷 駿)

これまでのこと これからのこと A・グヴィアズダ (インタビュー)

これは地下紙『週刊マゾフシェ』編集部によるアンジェイ・グヴィアズダへのインタビューであり、同紙の97号(84年8月23日付)に掲載された。

—刑務所を出て目にした外の世界のものごとは、あなたの予想と比べてどうでしたか？

木々がずいぶん成長したのには驚いた。そんなことは考えてもいなかったのね。人々もまた成長した。こう私が言うのは1976年～80年の重い経験があるからだ。あの頃われわれは数人だけで、印刷機もタイプライターもなく、財政はといえば自腹を切っていた。世間にもほとんど知られず、仲間もごくわずか。人々にとってわれわれの活動は、たとえ何がしか共感をもって見てくれたとしても、“関係ないよそごと”だった。

それからすれば、1984年の世界は実に素晴らしい。数百の地下新聞、数千の積極的活動家、数万の協力者、そしてグロテスクな選挙茶番劇をボイコットした数十万の人々。いまだき活動する連中はドン・キホーテだ、と思っっている人々ですら、何とかして彼らと結びつきを持っていたいと感じている。この点は根本的な変化だ。

戒厳令で、概念も人間も一本筋の通ったものになった。どうやら反共を叫んでいいようだな、と思っう時には軽薄に反共宣伝をしていた“口先人間”

たちは、もはやそれが許されないとや、まっ先に政府への忠誠宣言に署名して外国へ出てしまった。一方では、自ら10年の刑を宣告されながら他の囚人たちに「当局のお情けの特赦など拒否しよう」と呼びかけたエヴァ・クバシェヴィチのような、際だった人々の存在が示された。

私の見るところ、社会は予想されるほど意気阻喪してはいない。頂点のレベルで行われる秘密の政治ゲームがもたらす犠牲も損失もなしに社会に対して完全な勝利が約束されていた。人々は権威者を信じたいと思い、完全に裏切られた。しかし人々はそのでやる気をなくしはしなかった。苦い経験は彼らに考えることをさせ、彼らの自律的思想や見解を裏づけた。今後は、様々な相違点を「統一」というスローガンで塗りつぶしたりせず、また見解の相違を個人的な和解不能の言い争いというふうには考えぬことが大切だ。連帯に基づく協力とは、互いの相違点と共通点をしっかりと見きわめることなのだ。自らの意見を明文化し広く公表するグループやセンターを作らねばならない。身内で競争し合わず、各々の努力を共通の目標に向けるためにはこれ以外の方法はないと思う。

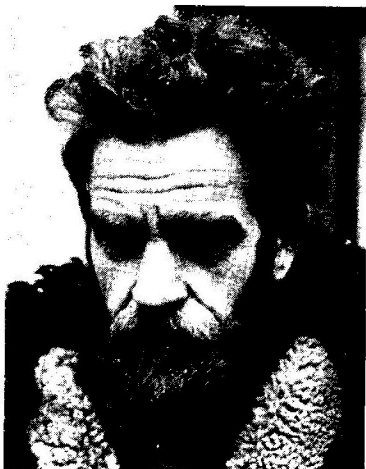
—2年半の地下運動についてはどう評価されますか？

「連帯」地下指導部の設置は戒厳令に対する当

然の対抗措置だった。これにより数千の人々が挫折感や意気消沈から救われ、持ちこたえたり戦列に復帰したりする助けになった。新しい地区委員会ひとつひとつの設置や暫定調整委員会(TKK)の創設は、鉄格子の中であって非常に喜ばしい知らせてくれた。地下の活動家が逮捕されるたびにわれわれはその人的損失を嘆き、後任者が決まると知るたびに大いに喜んだ。

しかし時が経つにつれ、地下秘密運動は方法として不十分なことがしだいに明らかになった。より多くの人と会えば地下活動家の現状認識もより正しくなるわけだが、それでは逮捕の危険が増す。そのため地下潜伏者は仲介者を通して情報を手合せざるを得ない。ところがいかに誠実な仲介者といえども自分の考え方や希望のプリズムを通して現実を見ており、彼らが有益だと考える決定が地下指導部によって下されるよう、何らかの解釈を加えた情報を届けているとみなさねばならない。地下の決定のいくつかは、こうした形で下されたものと私は考えている。もうひとつの問題は、仲介者を通じた情報収集は時間がかかることだ。社会の雰囲気の変化は変わりやすい。ワテンボ遅れて届いた「熱気が高まっている」との情報に基いてストやデモの決定が下されても、それが社会に届くころには人々はやる気をなくしているかもしれない。逆の場合だってありうる。

「連帯」地区委員会やTKKの存在は、一方では人々を活動へと動員した。つまり、何かしたいと望んでいる人を動かす誘因となった。これはプラスの効果だ。だが何にでも裏側がある。人々は指導者に頼り、自発的な積極性を抑えて指示を待っている。これはマイナスの効果だ。特に無気力や落胆ムードが支配的な時にそれがはっきり現われる。そうした時の指導部の存在は、消極的になってはいないというアリバイのようなものだ。マイナス効果が決定的に優位を占めるようになったら、地下指導部の解散を考えねばならなくなる。社会の動きに方向性を与え導くのが指導部なのであり、それができなくなった時、指導部が存在してもただ社会を欺くだけだ。地下指導部の最も重要な機能は声明や文書に自らの名を署名することにある。この機能は「地上」にいる人は果たせない。もし「地上」の活動家が本名で署名できるようなら地下活動は意味がない。



A・グヴィアズダ

〔文書や新聞の〕印刷や配布は秘密活動の仕事だ。だが社会全体が地下に潜る必要はない。「地下」と名づけられるものは、様々な反対派活動へのサービスの役割を果たさねばならない。一方、社会の中、人々の中での活動や政府への圧力は、公然活動でなければならない。たとえば、賃金体系変更に関する分析や、職場仲間への新労組ボイコット呼びかけなどは、誰がやったのか誰にもわからないというのではいけない。具体的な問題についての職場での意見発表は公然と行われなければならない。地下潜伏を続けている者を除けば、反対派は合法と非合法のさかためでバランスを取っているのだ。恐怖感、自分の意見や願望を述べることへの不安といった、全体主義体制が人々に押しつけている障害を打ち破ることのできるのは、公然の反対活動だけだ。全体主義者が壊そうとしている社会の絆は、公然活動の中でのみ結ぶことができる。この意味で、80年8月以前の反対派の活動方法は今でも有効だと言える。

——現在の活動形式は効果的でしょうか？

デモや請願やピラマキがすぐに効果を生むと期待するのは誤りだ。コミュニストどもは譲歩など

断じてしたくないのだ。自分たちがいかに堅固に持ちこたえられるか示そうと必死でふんばるだろう。われわれの行動がどんなものであっても、その直後に彼らが譲歩することはありえない。しかし彼らは社会を恐れており、すべての圧力に反応を示している。彼らが譲歩するのは、全部自分たちの手柄だと言えるような時だけだ。一方でわれわれの行動はポーランド支配層だけでなく他国の社会にも広く反響をまきおこしており、それぞれの国の政府に、われわれの要求を考慮しつつ対ポーランド政策を立てさせることに成功している。IMF（国際通貨基金）がポーランドの加盟とクレジット供与の条件として恩赦および「連帯」との対話をあげたのはその典型例だ。

——「連帯」の合法活動期を、今日ではどう見えていますか。

私は「連帯」の時期、粘りに粘ってついに政府に認めさせたあの自由の時期は、次の段階への準備期間だと考えていた。もちろん人々のために何かをなしとげた時期でもあった——たとえば土曜休日制のように。開きの次の段階への準備期間だという考えは、組合内での私の立場に大きな影響を与えた。私は組織構造の構築にはさほど興味を持たず、最大限の分権化を支持しつつけた。組合権力中央集権化の支持論は私にはいただけなかった。なぜなら組合指導部が投獄されるのは時間の問題と思っていたからだ。私はいくつもの小グループでの活動を支持した——それこそ頼みの綱だと信じていた。だからそれぞれの工場委員会の定期情報紙や印刷機を評価し、大規模な組合印刷所への設備集中に反対した——警察の手に落ちるのが目に見えていたから。私は小工場や小さなセンターを活性化させようと努力した。つまり、大工場従業員は「連帯」組合員総数の3～5パーセントにすぎないわけで、そんな大工場だけの占拠ストに頼って組合を守ろうとしても、さほど大きくない警察力で打ち破られてしまうだろうと思っていたのだ。通常スト——つまり欠勤スト——の訓練を提案したのもこの考えによることだ。

「連帯」の中には、思想を発展させプログラムを作り自らの領分を定義する、つまり知的活動のための理想的な条件がそろっていた。しかし、反

対の傾向もあった。「統一、統一」という叫びは言うに及ばずだ。何か活動を行おうと考えるグループはどっこも、「連帯」の傘下組織と認めてもらってはじめて活動が可能になると思っていた。「連帯」の支援は彼らに安全と人気を保証するものだった。たとえば「政治凶・思想凶擁護委員会」は、「連帯」にできない活動を行える団体として、「連帯」とは独立した形で設立された。しかしこれを「連帯」の傘下組織と認めるとの圧力が出てきた。結果的には「連帯」が責任を引き受けたことで彼らの活動は制限されざるを得なくなった。

——レフ・ワレサ委員長の自由の身になって以来の活動をどう思いますか？

彼自身の言葉を借りよう。彼は刑務所の上に乗渡されたロープの上で綱渡りをしている。絶対に落ちるまいと固く決心してね。

——恩赦で何か変化が起きるでしょうか。

きっと変わる。それは釈放された活動家の今後の行動にかかっている。彼らがどの程度の犠牲を払ってロープをつかみ続ける気であるかに。

——自由になった気分はいかがです。

自由じゃないさ。32万平方キロの監獄（ポーランド人民共和国）の中にいるんだ。看守ぬきの面会が時間制限なしに続いているようなものだ。そして今は看守が私を連れて歩くのではなく、私が看守を連れて歩いているのさ。

["Solidarność" Biuletyn Informacyjny No.96, 1984.9.19, Paris より。訳：高橋初子]



神話にとらわれるな——クラクフKOSの声明

déclaration du kos de cracovie

Bulletin d'Information, No.97,1984.10 3

【編集部注】^コス（社会抵抗委員会）は戒厳令布告直後全国に生まれた小さな抵抗サークルの総称。信頼できる数名の友人同士で構成された各サークルが自己の責任で相互に独立して多様な抵抗運動を行う。見解発表の共通の場として『KOS』という地下紙が発行されている。以下はクラクフのKOSの声明。

戒厳令布告からほぼ3年、情勢は安定しはじめていいる。一方で政府の政策に一貫性が認められ、他方で地下「連帯」その他の組織の活動は政治的色彩を濃くしつつある。同時に社会は、新たな力の対決や「正常化」——社会的抵抗の粉砕——が極端にまで進むことに今すぐには耐えられない。この結果、行動の新しい可能性の追求が必要になっている。

現在の統一労働者党政権の狙いは、欠陥だらけの体制の構造と機能には一切手をつけなまま国民を絶対的従属状態に服従させることである。新しいエセ民主主義諸組織は、圧倒的多数の国民を体制側にひき寄せ、政府と社会の対立を緩和し、いつか来る対決に際し政府の全責任を免除するものとされている（……）。

戒厳令の布告と経済の巧妙な操作そして配給制度のため、社会はよりよき生活に対する期待をなくし、いちじるしく無気力になっている。社会的絆は徐々に断ち切れ、社会は沈黙し、ますます操作が容易になっている。他方、体制変革の可能性に対する幻想は決定的かつ全面的に破れた。以上の結果、政府の政策に対する不承認はもはや抵抗運動や大衆的デモという形では表現されなくなっている。

政府と地下勢力の間の力関係はすっかり均衡し、しばらく変化は予想されない。したがって、地下活動は維持されるべきだとはいえず、それは社会の気持と要求に見合った息の長い路線を追求すべきである。「連帯」はこれまで多くの神話にとらわ

れていて、このことが現実と社会の要求に対するその見方を曇らせ、現実的な未来の綱領の作成を妨げてきた。その神話とはこうである。

- 1 包括的解決の神話
- 2 政府との和解の神話
- 3 地下組織を社会的信頼に値する唯一の形態とする神話
- 4 世界がポーランド問題に対して特殊な関心を抱いているという神話

反対派は絶対に多元的でなければならない。12月13日に生み出されたイデオロギー的真空を埋める必要がある。そのために「連帯」以外の反対派組織や政治的研究センターなどの新しい組織が活用できる。地下組織はポーランドの政治思想の再生に努力すべきである。

反対派の活動は地下に限定されるべきではない。合法的、半合法的活動の可能性はきわめて大きくこれを利用すべきである。それは、非合法活動よりもはるかに多数の人々を参加させ、社会的、文化的な価値が大きい。このような活動において最も有効かつ広範囲の連帯が実現される。それがとりわけ有効なのは経済と文化と宗教生活の領域である。社会が地下においてのみならず、強制された制度に対応する本物の、信頼に値する、しかし非政治的な合法的組織をも活用して、その希求の実現のための道を見出すことがこの上もなく重要である。こうして、共産主義政府の存続にもかかわらず、もはや統治すべき人民がいらないという状況が作り出されよう。地下国家よりもむしろ独立社会の建設が提唱される。

「連帯」が1981年の第1回全国大会で発した東ヨーロッパ諸国民に対するアピールがとりわけ重要である。これを政治的現実と転化しなければならない。その結果、「東ヨーロッパ諸国民連帯」が実現されよう。この地域に対するソ連の支配を容易にしている相互間のあの敵意をとり除くことが絶対に必要である。 [訳：水谷 駿]

ジャーナリストは それでも語らんとす

解説にかえて

——ジャーナリストのほろ苦しい思い

工藤 幸雄

ちいさなポーランド人

ステファニア・グロヂェインスカ

ぼくのかあちゃんは党员で
ぼくのとうちゃんは収容所
ばあちゃんはAK出身で
ぼくのじいちゃんはシオニスト

いい思いをしたのは かあちゃんが48年
とうちゃんが80年
ばあちゃんが57年
じいちゃんは楽しい思いをした年がない

いやな目を見たのは かあちゃんが56年
とうちゃんが82年
ばあちゃんが45年
じいちゃんが68年

——そうかい、坊や。で、君はだれ。
——ちいさなポーランド人。

(Stefania Grodzieńska: Polak Mały,
"Polityka", 31 VII 1982)

.....

1

.....

上の14行の詩のようなものを、まず読んでいただきたい。体制側の出版物に見かけたこの文章は、実は散文の形に組まれている。詩のように改行したのは訳者のいたずらなし工夫である。グロヂェインスカ(1914~)は諷刺作家、劇作家のイェジ・ユランドット夫人として知られる。彼女のことはさて置いて、ヤボな話ながら、さきにこの詩の解説をすませたい。戦後のポーランドを皮肉たっぷり諷刺してあますところないと思うのだが、そのわけを知ってほしいからだ。

「ぼく」の身内の構成は手がこんでいるうえに行きとどいている。まず祖父が「シオニスト」、だからユダヤ人ということになる。祖母のほうはロンドン亡命政府側の地下抵抗軍AK(国内軍: Armia Krajowa)に属したとあるからには、政治的な用語では「反ソ反共」、しかもほぼカトリック信者とみてよろしい。この両親から生まれたらしい父親はどうかといえば、反体制、つまり民主

的反対派——と推定される。KOR(労働者防衛委員会=社会自衛委員会)のシンパだったろうし、「連帯」運動に挺身したにちがいない。その父のつれあいたる母親は、幸か不幸か、共産党员だ。

では3人が別々に味わった快不快の年を年代順にながめよう。45年はポーランド「解放」、人民政権成立の年だ。この年、最大の地下組織AKの部隊40万は「自主的に」武装解除し、一部は戦後も内戦をつづけた。AKの兵士が夢に描いた自由と民主主義ももたらされることなく、ポーランドには悪夢のような東の体制がのしかかってくる。AKは新生のポーランド国軍の隊列からはじき出されたばかりか、総指揮官オクリツキ將軍らが「破壊工作の賊軍」の頭目としてモスクワで有罪の判決を受けるのは45年6月である。おばあちゃんは落胆の底にかきおとされた。

48年がかあちゃんを大喜びさせたのは、この12月、「社共共同」が成り、共産党のヘゲモニーのもとに人民ポーランドが歩み出したからだ。が、それから8年、「10月の春」が訪れた年は、スターリン主義に凝り固まっていたらしかあちゃん

の面目は丸つぶれとなった。政権についたゴムルカは中途半端ながらAKの名誉回復をやつての、12年だけ年をとったばあちゃんの顔に一時的なりと笑いが戻る。

戦後といわず長い歴史のなかで、つねに苦渋をなめたユダヤ人、そのじいちゃんが冷汗三斗、色あおぞめ、ため息ついて日かげの暮らしを送るのは68年、あの「3月事件」に火ぶたを切った反シオニストの闘争——といえままだしも聞こえはよいが、臆面もなく吹きあれたユダヤ人排斥の嵐である。その嵐が連日の新聞・ラジオ・テレビから荒れくるった日々。

80年がやってきた——夏の日の長くつづいた全国的なストライキ、「政労合意」、ワレサのもとにわかあがる「連帯」の歌ごえ。とうちゃんの有頂天の日はあまりに短く、「戒厳令」のさなかに頭を垂れてとうちゃんは収容所へと引き立てられて行く……。

この短かな一文に戦後の年月が、一家の人びとの喜びと悲しみに彩られて活写されている。作者の略歴を知ろうとしてワルシャワ発行の百科事典をめくる。大百科にも小百科にもなせか見あたらない。その名が出ているのは81年に出版の「ポーランド作家辞典」（第2部）だけなのだ。

ワルシャワで外国人のために編集されたポーランド語教科書のいくつかにはグロヂェ・インスカ作の気のきいたユーモア短篇がいくつか採用されているし、白水社版の「ポーランド語の入門」さえ、たしかその一篇を取めている。そんな彼女の名作をまとめた「諷刺傑作選」と銘うつ一冊が出てよきそうだが、未刊であるのも不思議である。

それはともかく、極端に短いながら、彼女の思いのたけをこめた文章が、当時まだ戒厳令下の週刊紙（82年7月31日付「ポリティカ」紙）の片すみになげなく載ったのも、また不思議といえば不思議ではないか。

書き忘れるところだったが、「ちいさなポーランド人」という題名には原典がある。

——君はだれ？ ——ちいさなポーランド人。

の問答形式で終始する10行の愛国的な短詩「ポーランドの子どもの公教要理（カテシズム）」はW・パウザ（Bełza, 1847~1913）の作で戦前の小学校の教科書には必ず載っていたという有名なものだ。散文ではなしに詩の形に訳したかった理

由は、そこにもある。

2

私たちの当初の計画では、本号は「文化の日」の11月にちなんで「軍政下にあえぐポーランド文化」とでもするつもりであった。「文学者組合」、「ペン・クラブ」の作家2団体が解散ないし不当な人事入れかえに追いこまれ、「ジャーナリスト協会」、「美術家組合」、「舞台芸術家組合」が強制解散され、「映画人協会」の会長ワイダ監督が退陣を余儀なくされた——等々の動きと、それをめぐる抵抗をまとめ、将来の展望を描き出せたら……と考えたのだった。

「連帯」運動は、良い意味での「文化革命」の性格をも持ち合わせていた。戒厳令が強行された81年12月13日の日曜日はワルシャワで「文化会議」が民間の呼びかけによって招集されるはずの日でもあった。政権から「自立」した「自主」の文化の芽えが始まっていた。それを軍政は冷徹にも摘みとろうとした。ふき出た芽は地下にもぐったが、地下菜は全国にひろがって行く——そんな構図が見せられたら……と願ったのだった。

私たちは企画を変更せざるを得なかった。私たちの入手できるかぎりの出版物には、この企画に役立つような記事があまりなかったためだ。個々の小さなニュースはあっても文化界の全体を見證して野心的な展望を試みる文章は皆無である。作家のだれが亡命し、どの学者が、役者が西にいるかの消息もまともでない。「連帯」運動が労働組合を中心とする運動である結果であるにせよ、その運動がより強大となるためには文化の問題を見すごしてはなるまい。

この号では予定の企画に代えてジャーナリズムの一角に光を当てるだけにとどめた。ここに訳出したのは「連帯」時代の「ジャーナリスト協会」の会長、ステファン・プラトコフスキの文章および、ポーランド・テレビで長らくニュース番組を担当して、のちに西側へ出国した女性の「職場日誌」である。ジャーナリストの良心と反骨をしかと見てほしい。

「連帯」の各ニュース紙をはじめとして、各地に行動基準、思想、戦術を多少とも異にするさまざまな地下出版が生まれている。そしてあるもの

は消えて行った。そこには職場を追われた数多くのジャーナリストが筆陣を張っていると思われる。本誌もいくらか論文を転載したKOS（社会抵抗委員会）のダヴィド・ワルシャフスキのような鋭い論客の正体は果たしてだれなのか、それとも複数の筆者の「匿名」なのか——といった興味も抱かれる。個人的な話をすれば、わが旧知の新聞人、リシャルト・カプシチンスキ（ワルシャワの週刊紙「クルトゥラ」）にいた彼は80年秋、党から離れたのも、ひょっとして、その「複数」のひとりではなのか。

なお最近の『コンタクト』（パリで発行されている亡命ポーランド知識人の月刊誌）によると、プラトコフスキの論文はもともと「ステファン・プラトコフスキの音の新聞」(Gazeta dźwiękowa Stefana Bratkowskiego) で流されたものである。

「音の新聞」ならば検閲の手のとどきようもない。彼の嘆きには、戦後40年を振りかえるグロヂェインスカの短詩のほろ苦さに通ずるものがあるようだ。

* 「音の新聞」……「音の新聞」の仕組みは次のようであるという。プラトコフスキは「個人的に、日記がわりに」自分の考えや論評をテープに録音する。これは別に罪に問われる種類の行為ではない。彼はそのテープを「不注意から紛失」してしまう。これも何ら犯罪ではない。テープは「誰か」に拾われ、複製され、各地に流れてゆく。プラトコフスキはしばしばテープを「紛失」するそうである。

ぼく抜きで

投票所へ足を向けない5つの理由

ステファン・プラトコフスキ

工藤幸雄：訳

Beze mnie : Stefan Bratkowski

"Solidarność" Biuletyn Informacyjny No.92, 1984.7.25, Paris

「連帯」の暫定調整委員会は、当局がめでたくも「人民評議会議員選挙」と名づける催しのポイコットを呼びかけた。ぼくが、この呼びかけに応ずるわけは何かを、改めて述べておきたい。それは、たとえ、だれからポイコットを呼びかけられなくとも、ぼくには1票を投じに出かける考えのない理由を明かすことにもなる。

ぼくが出かけない第1の理由は、ぼくが道法主義者であるからだ。この催しを実施する政権は、1981年12月13日、国家評議会が公布の権利を有しない越権の法令によってクーデターを遂行し自らの憲法を踏みじった。犯した条文は刑法の多くにわたっており、そのなかには死刑に該当する国家犯罪も含まれている。政権はしかるべき特例を設けて自らの責任のがれさえおこなわなかった。政権の歩む道をあとづけるものに殺害された人びとの死体がある——その人たちの死についてはいまだに何らの釈明もなされておらず、犯人に対する処罰ないし特赦については言わずもがなである。〔……2行ぶん意味不詳〕

ぼくが出かけない第2の理由は、この国の諸問

題の力による解決をぼくは決して容認できないからである。殺された人数が少数にとどまり、また刑務所と収容所に送りこまれた人数が割合として少ないことは何の名譽でもありはしない。これはボカサ〔中央アフリカの元独裁者〕にとってはあるいは名譽なことかもしれない、しかし——アフリカのジャングルの住民たちを傷つけるつもりはないが——何ごとかによって旧石器時代とは區別する必要がある。ポーランドはついおととい木から降り立ったわけではない。

ぼくが出かけない第3の理由は、そいつがぼくの政権でもないし、ぼくの国家でもないからである。われわれの1人びとりと同様に、ぼくは市民的諸権利を奪われている。われわれの1人びとりと同様に、ぼくは自らの職業組織〔ジャーナリスト協会を指す〕に入る権利をもたない、公衆に向かって発言する権利をもたない——政権が公布した法令は弾圧機構の役人が好きかってな時にわが家に踏みこみ、ぼくを捜査し、逮捕し、しかも罰則なしになぐりつけ、ころすことさえ許している。ぼくが生きながらえているとすれば、それはひと

えに、弾圧機構に雇われているのが悪党、サディスト、吸血鬼とかぎらないからだし、ぼくが気ままに歩いていられるのは、ぼくを投獄しても間尺に合わない人があるからだ。ぼくはまさしく人間形をした持りの目標であり、自らの大地の上で権利を奪いとられた3500万のうちの1人なのだ。だから、遊びたのしむなら勝手にやるがよい、ぼくは抜ける。

ぼくが出かけない第4の理由は、例によって例のごときいかさまのまやかしに参加する気になれないからだ。失業中だったぼくは1976年にも、1980年にも投票しなかった。けれども、その以前にはいつも投票に出かけたものだ、そっくりそのまま同じ連中が選挙されるとはわかっていて——なぜなら、ぼくはぼくと同じような数百万の人たちと共に確信していたからだ。誠実で賢明で善意をもつ人びとの辛抱づよい努力さえあれば、この政権をいつかは人民に近づけさせることが可能であり、この国家の体制を真正の社会主義へ導くことができる。言いかえれば、ぼくは信頼のゼスチュアをしていたことになる。現在の政権はわれわれの希望の信頼を最小限なりとりつけるために何ごともしなかった。それどころか却って、その泥靴を傲慢を腕力をひけらかしている。選挙は不在だし、いかなる自治も不在だ。なるほど、「選挙」に出かけるというゼスチュアには何の意味もないというのはほんとうだ、あの連中はそうしなくても当選する、結果は初めからわかりきっている。だがしかしぼくは何の意味ももたぬそういうゼスチュアをこそ拒否するのだ。連中はわれわれを見くびっており、権力の行使のためにはわれわれの支持は不要である、とか、それだけの力はたっぷりある、などと事あるごとに誇示している。そうか、それなら次のことだけはぼくに強制しようとしてもむだだ——あの連中をまともなポーランド人であると認めること、彼らはポーランドの合法政権であり、政権はまちがいをしでかすかもしれないが、あくまで善意によって導かれており、よそからの命令や圧迫、自らのコンプレックスと誇大妄想によって左右されるものではないと認めること〔それは絶対に認めてやらない〕。一介のポーランド人たるぼくが、彼らを認めないかぎり、ぼくにとって彼らは、強要できることしか命令できない占領者の政権以外の何ものでもないである

う。そして、それこそがぼくの力なのだ。

ぼくが出かけない第5の理由は、この政権の無能ぶりがおとなく堅実な人間に吐き気を催させるものだからだ。彼らのやることなすことはめっちゃくちゃだ。彼らは工業をカオスに陥れ、その混乱に対してあらゆるコントロールを失ったし、農業に至ってはずたずたに切り刻んでしまった。彼らは世論に対して政権を代表する仕事〔政府スポークスマンを指す〕を始終、自分の敵をつくることばかりが主な才能である男〔イェジ・ウルバン〕に任せた。対立の緩和をはかる代わりに、彼らはさらに教会まで敵に回そうとしている。文化の仕事をやらせるのに、文化ばかりか権力そのものからばかにされている連中に委ね、そのこと自体、文化関係の人びとに対する侮辱となるのが彼らにはわかっていない。何ごとにつけこのとおりである。彼らは自分の手で自分の破局を生産する連中なのだ。ここまで挙げた4つの理由がなかったとすれば、ぼくにはこのひとつの理由だけでも十分である。連中に支持の投票をすれば、それはぼくにとって、破局の賛成票を投ずることになる、ところがぼくは破局の責任を引き受けられないし、もっと悪いことに、どう破局を押しとどめればよいか、ぼくにはお手あげである。そういうわけだから、ぼくは抜かしてほしい。

親愛なる諸君、彼らはわれわれのモラルを腐敗させたこと、われわれを脅えあがった羊の群れに仕立てたことを世界に見せつけたい一心なので——甘いもので買収されもせず欺かれもしないのに、彼らの望むままの方向にぞろぞろと歩き出す羊の群れに。こうした声は彼らにとっては政治的にも、形式的にも重要ではない。これはもっばらモラルの試みにすぎない。しかもきわめて個人的な。

足を運べば、君は君自身に向けた彼らの侮蔑の権利を確認することになる。足を運ばなければ、君の身に何かか振りかかってくると思うのか——何百万もの人びとを相手にいくら時間があっても連中には足りやしない。なればこそ、背すじを張って、にっこり自分にほお笑んで言うことだ——わたしは抜けると。



クローズアップ — ニュースの裏側

ダヌタ・パツィンスカ＝ジェヴィンスカ

Zbliżenia : Danuta Pacynska-Drzewińska
"KONTAKT" No.4(24), April 1984, Paris

【編集部より】 筆者の働いているのは、国営テレビのニュース番組製作部。このニュース番組 Dziennik Telewizyjny (訳文中ではDTVと略記) は毎日夜7時30分からの30分番組である。なお、原文が長大なため、大幅にカットして訳したことをお断りする。

●1979年2月10日 土曜

ヤロシェヴィチ首相のお達しにより、テレビは娯楽に力を入れることになった。早速今日からコメディ映画やサーカス中継、ショー番組を2倍にふやせとテレビ・ラジオ委員会議長シュチェパンスキが命令。DTVも最後は軽い話題でしめくらねばならないという。これすべて国民を楽しませるため……。

●1979年2月25日 日曜

党の新聞・ラジオ・テレビ担当部長から新しい指示。すぐに「1979年冬」という題のフィルム・ルポルタージュを作れ、しかしてそれは、この冬の寒波と降雪こそがわが国農業の現状の元凶であることを明白に示すものでなければならない。

●1979年4月27日 金曜

今日の国会でギエレクト第一書記が演説。DTVでは部長白らが議会の録画テープをチェック。一番重要なのは、第一書記がハンサムで感じよく、できる限り笑顔で写っていること。第一書記はフィルムに収まったり、テレビで自分をアピールするのが大好きなのだ。もう何年も、ニュースといえば冒頭は「ポーランド統一労働者党中央委員会(省略形のKC PZPRを使うことは許されない) 第一書記、同志エドヴァルト・ギエレクト(“同志”という言葉はニュースではギエレクト、ヤロシェヴィチ、ヤブウォンスキ [国家評議会議長＝元首] の3人にしか用いない) は……」と始まるの

がお定まり。それにクローズアップ。画面いっぱい顔のクローズアップはギエレクトだけの特権で、ヤロシェヴィチ、ヤブウォンスキは背景に甘んじなければならない。

●1979年6月9日 土曜

【ポーランド訪問中の】ローマ法王さまのノヴァタでのミサの録画を見る。ラジオと新聞はこのミサを「モゴワ村の信者との会見」として伝えた。素晴らしい説教。「労働は人間性の充足であって、奴隷制とは違う」。

これをニュース用に編集するのは特上のプロバガンダ屋たち。結局この説教は、何の意味も汲みとれぬように切り縮められるだけ。

●1979年9月7日 金曜

DTVで週3回流するため、第2次大戦中の資料やフィルムを準備せよとの命令を受ける。その裏はこういうこと——戦争中は今よりはるかにひどい状態だった、と視聴者に見せるため。

●1980年1月9日 水曜

国内のニュースの画面には牛、豚、羊などが映らぬように、との新たなお達し。視聴者に、店では売っていない肉のことを不必要に思い出させないための心づかい。

●1980年7月3日 火曜

【前日の値上げ発表をきっかけに】多くの工場ですトライキ中との知らせがはいる。シュチェパンスキ議長はニュースでこれに触れることを一切禁じる。

●1980年7月19日 土曜

DTVでは「10数ヶ所の工場で操業停止が起きている」と放送。「経済・社会状態が悪い現在(いつから悪くなったのかしら。そんなことこれまで



「歩道にペンキで大きく書かれた言葉
「テレビはまやかしてやめろ」」

ーナリストたちが「聴取者への手紙」を提出するとともに新聞に発表した。彼らはその中で、「自らの希望と職業倫理とにかなう形で聴取者に仕えることができない。ラジオのニュースは検閲されており、真実や事実を伝えるルポは放送されない」と聴取者に詫言っている。

ロランツは、「この手紙の署名者（約300人）は解雇されねばならぬ」と述べる。

●1981年8月24日 月曜

意識的な世論攪乱に関し、代表者評議会の名において私がDTV部長に抗議に行く。

テレビ・ラジオ局「連帯」の会合でテレビ、ラジオのストライキの可能性を討議。ストが成功するかどうか、意見が分かれる。放送技術部の人が「今はまさに言葉どおり銃口つきつけられて仕事をしている。テレビ局内に銃を持った保安部隊員がいるんだ」と発言。

●1981年9月25日 金曜

フラネク〔夫〕と一緒に、休暇をとってグダンスクの「連帯」全国大会へ行く。

●1981年10月7日 水曜

休暇は終わり。全国大会では資料、メモ、録音をとってきた。いつの日かこれで番組が作れるかもしれない。今のところは誰にも秘密。

●1981年10月22日 木曜

調整委員会で、ラジオ・テレビ番組監視につい

での取り組みを国会に求める公開状を作る。党員代表も含めて全員が署名、国会に提出する。

●1981年10月26日 月曜

〔公開状のことで〕ラジオ・テレビ局内党員会委員長に呼ばれる。私は自分の考えを言った。「世の中にいるのは一握りの反革命を願うグループだけじゃありません。公的生活に参加したいと望む社会全体や、職場や国内の出来事に関心を持つ権利と義務を有する合法的諸団体もあるので。ラジオ・テレビ委員会と話してもらちが明かなければ、国会に訴えてもおかしくないでしょう」。

●1981年11月6日 金曜

ロランツが「国会への公開状は、ラジオ・テレビ委員会指導部への不服従行為である。諸君には政治的性格の行動をする権利はない」と言う。

●1981年11月25日 水曜

SDP本部、つまりいわゆる中立地帯で、私たちとジャーナリスト出身議員との会合。期待していたマウツジンスキ、オスマンチク〔いずれも無所属の中立派議員〕らではなく、別の議員6人が来た。2点について議員たちの支持をお願いする。ラジオ・テレビのニュース番組、とりわけDTVに対する早急な議員介入と、新しいラジオ・テレビ法の作成に取りかかること。1人の議員が退席したが、残りは誠実そうに話を聞いて、支援を約束してくれた。調整委員会の代表数名が12月1日の国会での会合に招待された。ラジオ・テレビ委

員会指導部も同時に招くという。国会からの招待は、議員が私たちの委員会を認めてくれたこと、と大喜びした。

●1981年11月30日 月曜

ロランツの拒絶で12月1日の国会での会合は流れたと、議員から知らせが入る。

●1981年12月8日 水曜

興奮の1日。私たちは国会の文化委員会に参加した。

ロランツは番組についてでなく、管理面、技術面についてばかり述べ、K議員から本質面の分析の欠如を指摘される。

ブコフスキ議員はテレビ・ラジオのニュース全般を批判、ラジオ・テレビ法はマスコミ私物化を禁じた憲法83条に違反していると発言。マウツジンスキ議員は現行ラジオ・テレビ法はアナクロであり、改正が必要だと述べる。

私たちテレビ・ラジオ・ジャーナリストの代表たちはテレビ・ラジオの内部検閲等について、実例をあげて述べる。

ラジオ・テレビ委員会副議長ツェリホフスキ：「嘘だ！ ラジオ・テレビ委員会が反政府的政策を行っていると言うなんて！（マウツジンスキ議員「誰がそんなことを言いました？」）〔続いてツェリホフスキはジャーナリスト代表ひとりひとり名指しで罵倒する〕何がニュースで何がニュースでないかは、私自身が決める！ われわれは真実を言っているのに、誰も信じない！」。

Fの発言。「ツェリホフスキ氏はラジオ・テレビ委員会のありさまを身をもって示してくれました」。

こうした意見の応酬の後、文化委員会の結論が発表された。「文化委員会はラジオ・テレビをコントロールする権利と義務を有する。憲法に反する現行法の改正にとりかからねばならないと国会議長に報告する。また、ニュース番組を監視する議員委員会の設置が有意義である」と考える。

●1981年12月12日 土曜 / 12月13日 日曜

〔戒厳令施行。夜中に警察が来て、夫のフラネクは収容所へ連行される。約2ヵ月後に釈放。〕

●1982年1月16日 土曜

〔戒厳令以来テレビ局に入構を認められなかった私が〕いわゆる査問に呼び出される。

「あなたの政治姿勢について話しましょう。あなたは、この〔10月に提出した〕国会への公開状に、代表者評議会議長として今ここでもう一度署名しろといわれたら、署名しますか」

「署名します」

「本当にこの破廉恥な公開状に？」

「もちろんです」

「あなたは国営ラジオ・テレビを破壊したいんですね」

「それは私の力を買いかぶりすぎですわ」

「プラトコフスキをどう思います」

「これは尋問なんですか？」

「戒厳令導入をどう思います」

「拘禁されている者の妻にする質問じゃありませんわね」

「『連帯』の宣伝についてどう思っていましたか」

「いつだって、あれじゃだめよ、専門家にやらせなきゃ、と言っていましたわ」

「連中が嘘を言うのに、人々はそれを信じた」

「あら、DTVは相変わらず嘘を言っていますが人々は全く信じませんわね」。

●1982年3月31日 水曜

正式な解雇通知を受ける。

DTVで働いた年月は16年。ラジオ・テレビ委員会の年次表彰を受けたこともあるし、功労金十字章だってもらった。他にもメダルがある。これを全部返そうかと考える。でも誰に？

DTV生活にはいくつかの段階があった。最初はこの仕事に魅了された。次に、私たちの生活とDTVで流されるものとの隔りがどんどん広がるのがわかった。そのころは、誰も信じないニュースを流しても社会に別に害はない、せいぜいお笑いぐさだわと思っていた。それから、ラジオとテレビは社会に向けられた危険な武器、社会操作と社会不安惹起の精巧な道具であることがわかった。そんな状態で、何もせずにいることができたろうか？ できはしない。たとえ私の努力がすべて失敗に終わるとあらかじめ宣告されたとしても。

〔訳：高橋初子〕

委員会指導部も同時に招くという。国会からの招待は、議員が私たちの委員会を認めてくれたこと、と大喜びした。

●1981年11月30日 月曜

ロランツの拒絶で12月1日の国会での会合は流れたと、議員から知らせが入る。

●1981年12月8日 水曜

興奮の1日。私たちは国会の文化委員会に参加した。

ロランツは番組についてでなく、管理面、技術面についてばかり述べ、K議員から本質面の分析の欠如を指摘される。

プロコフスキ議員はテレビ・ラジオのニュース全般を批判、ラジオ・テレビ法はマスコミ私物化を禁じた憲法83条に違反していると発言。マウツジンスキ議員は現行ラジオ・テレビ法はアナクロであり、改正が必要だと述べる。

私たちテレビ・ラジオ・ジャーナリストの代表たちはテレビ・ラジオの内部検閲等について、実例をあげて述べる。

ラジオ・テレビ委員会副議長ツェリホフスキ：「嘘だ！ ラジオ・テレビ委員会が反政府的政策を行っていると言うなんて！（マウツジンスキ議員「誰がそんなことを言いました？」）〔続いてツェリホフスキはジャーナリスト代表ひとりひとり名指して罵倒する〕何がニュースで何がニュースでないかは、私自身が決める！ われわれは真実を言っているのに、誰も信じない！」

Fの発言。「ツェリホフスキ氏はラジオ・テレビ委員会のありさまを身をもって示してくれました」。

こうした意見の応酬の後、文化委員会の結論が発表された。「文化委員会はラジオ・テレビをコントロールする権利と義務を有する。憲法に反する現行法の改正にとりかからねばならないと国会議長に報告する。また、ニュース番組を監視する議員委員会の設置が有意義であると考える」。

●1981年12月12日 土曜 / 12月13日 日曜

〔戒厳令施行。夜中に警察が来て、夫のフラネクは収容所へ連行される。約2ヵ月後に釈放。〕

●1982年1月16日 土曜

〔戒厳令以来テレビ局に入構を認められなかった私が〕いわゆる査問に呼び出される。

「あなたの政治姿勢について話しましょう。あなたは、この〔10月に提出した〕国会への公開状に、代表者評議会議長として今ここでもう一度署名しろといわれたら、署名しますか」

「署名します」

「本当にこの破廉恥な公開状に？」

「もちろんです」

「あなたは国営ラジオ・テレビを破壊したいんですね」

「それは私の力を買いかぶりすぎですわ」

「プラトコフスキをどう思います」

「これは尋問なんですか？」

「戒厳令導入をどう思います」

「拘禁されている者の妻にする質問じゃありませんわね」

「『連帯』の宣伝についてどう思っていましたか」

「いつだって、あれじゃだめよ、専門家にやらせなきゃ、と言っていましたわ」

「連中が嘘を言うのに、人々はそれを信じた」

「あら、DTVは相変わらず嘘を言っていますが人々は全く信じませんわね」。

●1982年3月31日 水曜

正式な解雇通知を受ける。

DTVで働いた年月は16年。ラジオ・テレビ委員会の年次表彰を受けたこともあるし、功労金十字章だってもらった。他にもメダルがある。これを全部返そうかと考える。でも誰に？

DTV生活にはいくつかの段階があった。最初はこの仕事に魅了された。次に、私たちの生活とDTVで流されるものとの隔りがどんどん広がるのがわかった。そのころは、誰も信じないニュースを流しても社会に別に害はない、せいぜいお笑いぐさだわと思っていた。それから、ラジオとテレビは社会に向けられた危険な武器、社会操作と社会不安惹起の精巧な道具であることがわかった。そんな状態で、何もせずにいることができたろうか？ できはしない。たとえ私の努力がすべて失敗に終わるとあらかじめ宣告されたとしても。

〔訳：高橋初子〕

1984年夏ポーランド訪問記

ポーランドでの「出会い」

南山大学経済学部 家本 博一

はじめに

今夏、私は40日間ほどソ連とポーランドを旅する機会に恵まれた。

ポーランド旅行の主目的は、ウチ大学経済社会学部主催の経済セミナー（総合テーマ「ポーランド経済の活性化について」）で研究報告を行うことであったが、私の個人的な関心は、経済セミナーの総合テーマとは多少異なる方向に向けられていた。その方向とは、ポーランドの労働者・市民層とカトリック教会との過去と現在をできるだけ事実に基づいて調べ、そこからなんらかの「仮説」を引き出すことができないだろうか、というものであった。ある意味では、この方向には、私のポーランド経済研究のチェックという意味が含まれていた。

幸いにも、多くの方々の御協力や御助言を得て、各地にある諸々の団体や組織（官製と非官製）及び歴史的なモニュメントなどを訪ねることができた。ここでは、それらのなかから、私自身にとって印象深く感じられた幾つかの「出会い」について記させていただく。

I レフ・ワレサ氏との「出会い」

7月30日午前、私はあるタクシー運転手に連れられてワレサ氏の自宅（グダンスク郊外）に案内された。その前日、私が彼のタクシーに乗り合わせるという全くの偶然が契機となった「出会い」であった。英語を流暢に話すこの運転手氏は、1982年9月に「連帯」メンバーを理由に失職するまで約10年間中等学校の英語教師をしていた由である。彼の話しによれば、彼は現在も地下「連帯」の出版関係の仕事をしている由である。

われわれ2人がワレサ氏のアパートの前まで行

くと、数人の男たちが極めて訝しげな表情でわれわれを出迎えてくれた。彼らはミリツィア（警察）のメンバーであるが、運転手氏が5米ドル（私は彼に今日ここに案内してもらってお礼として20米ドルを渡してあった）を彼らの最年長者に手渡すと、いとも簡単に面会を許可してくれた。但し、次のような3つの条件を申し渡された。第1は、30分以内に面会を終え、写真撮影は1枚に限ること。第2は、面会はワレサ氏のワゴン車のところ（ワレサ氏が運転席に座り、私がドアの外に立つ）で行うこと。そして、第3は、必ずミリツィアの通訳（英語あるいは仏語）を通して話しをし、メモをとらないこと。

ワレサ氏との話し合いは20分強続いたが、その内容は主に来日の思い出（最も安全な話題）と最近の市民生活についてであった。

来日の思い出については、来日の経緯や来日中の経験を細かく話してくれた。なかでも、「なぜ最初に日本を訪れようという気持ちを抱いたか」と「日本の企業労働者についてのイメージ」という2つの話しは、ワレサ氏の本音を垣間見ることができた点で興味深かった。

前者については、彼は以下のような3つの点を話してくれた。第1は、「連帯」運動に対する国際的な理解を深める必要性を強く感じていたときのタイムリーな招待であったこと。第2は、同一勢力圏（恐らく東欧諸国をさす言葉であろう）の労働者や市民に「連帯」運動の「真の意義と方向」を理解してもらうために、敢えて異なる政治体制の国へ行こうと決心したこと。そして、第3は、経済発展のモデルと考えていた日本の実態を是非自分の目で確認したかったこと（傍点筆者）。

後者については、彼は以下のような2つの点を話してくれた。第1は、どうすればあのようにシステムティックに仕事を組み立てることができるの



ワゴン車に乗っているワレサ 胸に「黒いマドンナ」の像をつけている。(21、23頁の写真はいずれも筆者撮影)

かという驚きを感じたこと。第2は、日本の労働者像をポーランドのモデルにしようと考え、自体に大きな困難があるのではないかということ。そして、イメージについては「よく働きますね」という返事がかえってきた。

他方、最近の市民生活については、彼の話しはミリツィアを刺激する内容になった。ワレサ氏がインフレーションや物資流通の不備を具体的な例をあげながら指摘(批判)したために、再三再四ミリツィアに発言を制止されていた。

私自身、ポーランド滞在中に何度となく経済政策の不備や欠陥を非難する声を聞いたが、そのような非難のなかでも、ことに一般の労働者や市民による非難が最も厳しいものであったように思われる。彼らこそが経済不振の最大の犠牲者なのであろう。(話しは逸脱するが、私が面会した各地の大学教師やエンジニアたちも、同じく経済政策を非難するが、その論点は必ずしも一般の労働者や市民のそれとは同じものではなかった。というのも、彼らの多くは、例えば賃金体系一つをとってみても、「連帯」運動の結果、彼らの賃金が絶対的にも相対的にも低くなったことをあげて経済政策を非難していた。逆に、私が配給制度下のクーポン券の多さを指摘すると、彼らの多くは苦笑いをしながら次のように答えた。「その問題は、経済政策の問題ではなくて社会政策のそれであるから、ここでの議論の枠外の問題である」と。この答えを耳にするたびに、ワレサ氏がインテリゲンツィアに対して懐疑的な考え方を抱いているとい

う話しが、私にはよくわかるような気持ちがあった)。

別れる際になって、ワレサ氏は私にこう付け加えた。「あなたには自由な目と耳が2つもある。どうか、ポーランドの実状をしっかりと見聞して下さい。そして、日本の友人の皆様にあなたの見聞きたことをそのままお伝え下さい」と。そして、私がカトリック教の信者であったため、彼の胸につけられていた「黒いマドンナ(聖マリア)」像を指して十字をきってくれた。

II 「黒いマドンナ」との「出会い」

ポーランドの過去と現在を知ろうとすれば、この民族(国民)が経験し記憶しつづけている幾多の出来事とともに、ローマ・カトリック教会の果たしてきた(正・負両面の)役割にも注目しなければならぬ(ここでは、極めて少数の信者しか有さない御用団体ポーランド・カトリック教[PAX])には触れない)。

ポーランドのカトリック教信仰では、歴史的にみれば、ローマ・カトリック教の「正統派的な」信仰が保持されている反面、聖マリア信仰が他に比べてかなり強いものになっている。これを示す象徴が「黒いマドンナ」信仰である。

8月10日-13日、私は「黒いマドンナ」を記念するチェンストホーフのヤスナ・グラ修道院を訪れた。一口にヤスナ・グラ修道院と言っても、その名の通り高い丘に各種の建造物(23種類)が集められた大きな修道院である(1382年建立)。

毎年8月15日（「聖母の被昇天」の記念日）の前後には、ポーランド各地から約100万もの信者がこの地を訪れ、「黒いマドンナ」の祭壇の前で敬虔な祈りを捧げている。

夏休み中とは言え、ポーランド各地の教会にも多数の信者が御ミサに詰め掛けていたが、ヤスナ・グラ修道院ではまさにその極みといった感がした。

私はこの修道院を前後3回訪れることができたが、そのいずれの際にも、祭壇の前で祈り、司祭の説教に耳を傾ける人々の表情が各地でみた同じポーランド人の表情に比べて実に晴やかなものであった。

Królewskie pokoje（小部屋の集まったところ）と称される建物の2階には「黒いマドンナ」の本物の絵が無造作に掲げられていたが、私にとってこの「黒いマドンナ」の表情はこれを見るものの気持ちによっていかようにも変わりうるものように思われた。私の個人的な経験を記させていただければ、例えば私がある小部屋で妊娠1カ月・2カ月・3カ月そして5カ月の赤ん坊の堕胎の写真（多数の写真の横には「このこととナチの強制収容所での虐殺との間に違いがあるか」というマザー・テレサの言葉が掲げられていた）をみた後では、「黒いマドンナ」の表情は深い悲しみに沈んでいるように思われた。また、ワレサ氏夫妻がノーベル平和賞の受賞を「黒いマドンナ」に報告し、敬虔な祈りを捧げているビデオを私がみた後では、「黒いマドンナ」の表情は希望と期待に満ちているように思われた。

ヤスナ・グラ修道院の横の広場では、各地からやってきた巡礼団（各群は数百名ほど）が聖マリアを讃える歌を歌いながら「連帯」の旗をふって祈りを捧げていた。巡礼団を引率している司祭に尋ねると、「黒いマドンナ」と「連帯」はわれわれの希望の光であるという旨の答えがかえってきた。

III 強制収容所との「出会い」

今回の旅のもう一つの関心事として、私は一般のポーランド人が建国40周年をどのようにうけとめているのかを知ろうとした。このため、会う人ごとに建国や独立について話を聞くだけでなく、



ヤスナ・グラ修道院

彼らの話しにでてきた歴史的なモノユメントをできるだけ自分の目で確かめることにした。この結果、はからずも、各地の強制収容所跡や刑務所跡及び戦跡を訪ねることになった。しかも、多数の方々の御尽力で、一般には公開していないフィルムや写真を見ることができた。

国立博物館となったり、記念碑の建てられている立派な史跡が多かったが、なぜかそれらは旧ドイツやロシア帝国に関係するものばかりであった（余談ではあるが、各地に建立されているソ連軍による解放の記念碑に花束が捧げられている光景を見ることはできなかった）。しかし、私が話を聞くことができた人々に共通する内容は独ソ両軍による蛮行であり、両軍による占領の経験であった。

ここでは、ドイツ軍の強制収容所との「出会い」に絞って印象深かったことを記させていただくが、ポーランドの多くの人々は、今でこそ友好国と言われているソ連の蛮行についても決して忘れてはいないことを改めて強調しておきたい（ウチチ大学でお世話になったある若い教授は、彼の祖父がカチンの森で虐殺されたことを私に何回も話していた）。

今回の旅のなかで、私はドイツ軍の蛮行を示す

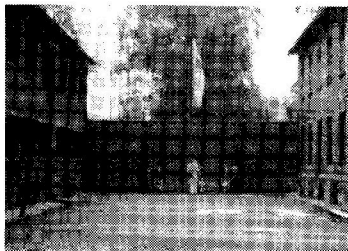
強制収容所跡やゲットー跡を合計12カ所ほど見てまわることができた。アウシュヴィッツ—ビルケナウ（オシフィエンチム—ブジェジナカ）、マイダネク（マイダンク）、トレブリンカ及びウーヂの4カ所では、未公開のフィルムや写真を多数見ることができた。これらのフィルムや写真は、ドイツ軍が記録の目的で撮影したもの（フィルムの大部分がトーキーである）で、撤収に際して廃棄し忘れた（？）ものである。これらのフィルムや写真がポーランドに「返還」されたのは1973年1月であったと教えられた。

前述の4カ所のうち、前3カ所で見たフィルムは、登場人物こそ異なるものの、内容はほぼ同じのものであった。これらのフィルムはいずれも、4通りの処理方法（絞首刑・銃殺刑・毒ガス刑・餓死刑）をひとつひとつ実際の場面を織りまぜて展開してゆくものであった。絞首刑で、あるいは銃殺刑で、あるいは毒ガス刑で、そして餓死刑で人間が死に至る姿が映し出されるたびに、私は胸の締めつけられる思いがした。と同時に、殺す側の人々だけでなく殺される側の人々の表情が極めて冷やかなものであったことに大きな驚きを禁じえなかった。せめてもの慰めは、アウシュヴィッツで見たフィルムのなかで、今はカトリック教の聖人に列せられた聖マクシミリアノ・コルベ神父が労働の場や餓死刑の場で聖歌を歌っている姿を見ることができたことである。私にとって、生前の聖コルベ神父との初めての出会いであった。

他方、ウーヂで見たフィルムは前3カ所のそれとは性格を異にしていた。ウーヂにはポーランド唯一の子供だけの収容所があった関係で、フィルムでは専ら収容所内での子供の生活の実態が紹介されていた。残酷さという点では前3カ所のフィルムには及ばないが、子供たちの栄養失調や諍いの場面などは別の意味で恐ろしいものであった。

ただ、写真をみる限りでは、ウーヂの写真も残酷さはひけをとらぬものであった。約20枚ほどの写真には、囚人を3階建てのほそ長いブロックに入れたまま、外から火炎放射器で焼き殺す場面が記録されていた。

これらのフィルムや写真を見るにつけ、私にも、ファシズムのもつ恐ろしさとともにこれらを経験し記憶している国民の心の傷の大きさを少しは理解できたのではないかと思われた。



おわりに

以上では、私が経験した「出会い」について記させていただきました。そこには、思いもよらない「出会い」もあれば、自分自身の生き方までもが問い直される「出会い」もあった。また、人間の心の優しさを実感できる「出会い」もあれば、人間の最も醜い姿をいやと言うほど見せつけられた「出会い」もあった。更には、信仰心と愛国心の強さを実感できる「出会い」もあれば、逆に、口を極めて白国の状況を非難し憂慮する人々との「出会い」もあった。

私自身にとって、これほど実り多い「出会い」はこれまでにはなかった（否、あったかもしれないが、私にそれを感じる力がなかったのかもしれない）。

最後に、ウーヂ郊外の小さな教会で私が信者の前で話しをした言葉（一部）を記させていただく。

「ポーランドの現在の状況は極めて多くの問題を内含していますが、全くの野蠻と荒唐だしかないというのも誤りでしょ。あなた方には2つの大きな希望の光があります。この2つは、自由であると言われている日本にもないものです。「連帯」とカトリック教信仰——これは、あなた方ご自身が選んだものです。そして、この2つの光は、労働者や市民にとって必要なものであるだけでなく、ポーランドにとっても必要なものでしょう。日本にも、あなた方の状況に強い関心をもっている人々が多数おられます。異なる政治体制のもとでも、彼らは決してあなた方を裏切ることはありません。ポーランドの人々と日本の人々との友情が今後ますます深まりますように」。

1984年10月13日

人それぞれ 街それぞれ

—ワルシャワ、ブラハ、ブダペスト探訪記

星 洋子

この夏私は、夏休みを利用して毎年開講されている、ワルシャワ大学の外国人のためのポーランド語講座に参加することで、念願のポーランド行きの夢をかなえることができた。1ヵ月のワルシャワ滞在期間中にはクラクフ、グダンスクにも足を伸ばし、さらにその後2週間という短期間ではあったがブラハ、ブダペスト、ウィーン、パリの各都市をも訪れることができた。そこでここでは特に東欧3ヵ国の首都であるワルシャワ、ブラハ、ブダペストにしぼって、ブラハとブダペストについては3、4日、旅行者として滞在した範囲で私の感じとったことなどを思いつくままに書いてみたい。

ブラハ、ブダペストという、'56年のハンガリー事件、'68年の“ブラハの春”を思い起こされる方も多いかもしれない。おそらくその時の記憶が人々の脳裡から消えることはありえないだろうとは思うが、'84年の現在、少なくとも毎日の日常生活にその痕跡は残っていないように私は思った。もともと、いまだにその時の傷を深く負ったまま生き続けている人もいないわけではないだろうし、物理的な痕跡——たとえば当時の弾痕など——は市内を注意深く探せば発見できるのかもしれない。

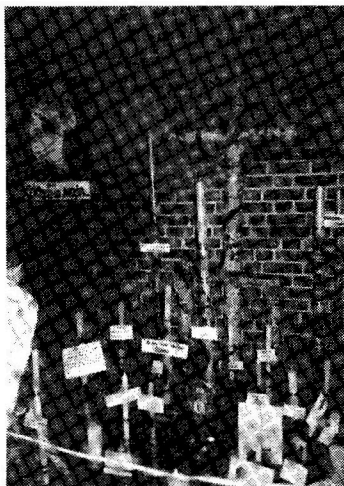
このような実際に目に見える形で過去の歴史の跡を最も今にとどめているのがワルシャワの街である。ヴィスワ川を越えたブラガ地区では第二次世界大戦中の銃弾の跡をまざまましく残している建物を見かけたし、私がワルシャワに到着したその日は、ワルシャワ蜂起からちょうど40年目に当たる日で、市内の至る所でローソクの炎が燃えていた。道行く人々がさりげなく戦争中の歴史を刻んだプレートの前に立ち止まり、持ってきたローソクに火をともし、花を供え、祈りを捧げ、何事もなかったかのように立ち去って行く姿に、ポーランド人が生きている限り絶えることのないであろうローソクの炎と、40年の歳月と、今は遠く離れてしまった日本と、日本人である自分について考えざるをえなかった。

ところで、一口に“東欧”（その定義も人によってさまざまだが）といっても、それぞれの国や

地域が“東欧”といわれるようになるまでにはぐくんできた歴史や文化は現在に受け継がれて、今回私が訪れた代表的な3つの街にも、それぞれに独特の味わいともいうべきものが感じとれた。

まずブラハは中世のヨーロッパの雰囲気をもよく残している街である。戦災を免れた旧市街の建築物からは大小幾つもの尖塔が屹立し、細く狭い石畳の道が迷路のように交錯する。しかし中世の遺産に圧倒されるよりは、むしろ全体的に小じんまりとした街並みの中で落ち着きを感じるこの方が多かった。その一方で、ブラハの目抜き通りの石畳の上を市電や自動車が行き抜く、ワルシャワでは駅でも動いていることの少ないエスカレーターが地下道に通じていたり、私と同じ目と髪の色は黒だけれど全体的に彫りが深くて色の浅黒いアジア系の人たちがかなり目についたりするのが現代たるゆえんだが、ショーウィンドーをのぞいても品数はかなり豊富で、バラエティに富んでいる。人々の表情にもどこかおだやかなものを感じられ、たとえば一日の終わりにには友と陽気なビールを飲み合い語らうといった質素でつつましく、ささやかな楽しみのある生活が現在の一般的なブラハの人々の姿のような気がした。

次にブダペストでは、そのスケールの大きさにまず圧倒された。それは人の多さ、自動車の多さ、物の多さ、全体的にとどろりと大づくりの建物の数々といった表面的なことにとどまらない。ブダ側の高台からドナウ川をはさんで地平線の彼方にまで広がる街を見下ろすと、この街のもつ包容力の大きさとでもいったものと、ドナウ川を往来した東西の文化を吸収し発展してきたブダペストの変遷が少なくとも私には感じられたのである。ところでブダペストでは物資が豊富なこととは以前から聞いてはいたが、ポーランドに1ヵ月滞在し、ブラハを経由した後で、幅をきかせるペプシの広告や、清涼飲料水の自動販売機や、ジーパンをはじめとするいわゆる“西側”的な製品が（衣料品のデザインも洗練されたモダンなものが多い）少なくともそれまでには見られなかった「商品を売る」という精神の垣間見えるようなやり方で一



グダンスクの聖トリキッド教会内部（筆者撮影）

つまり他よりもより目につきやすいように——ウィンドーに飾られているのを目の当たりにすると、さすがに驚き、ハンガリーを訪れるポーランド人が多いことを思い出して（現に私もブダペストの駅や旅行社で15人はポーランド人と行き合った）複雑な心境にならざるをえなかった。それはさておき、ブダペストの人々はぜいたくというわけでは決してなく、ショーウィンドーの奥のかなりのもも、簡単に買えるとは限らない。しかし街全体が明るく活気に満ちていたことは確かで、ここでは人々が生活をより楽しむために必要なものを選ぶだけの余裕と自由があって、現在はこうした消費生活のバランスがかなりうまく保たれている状態にあるように私には思われた。

さて本来順番からいって一番最初に来てよいはずのワルシャワが最後に来てしまったのは、ワルシャワについての印象が帰国後約1ヵ月が過ぎようとしている原稿執筆時の現在に至ってなお混乱しているからである。ワルシャワについて、とても一言では語り尽くせないが、それがまたまとまりのないものに終わってしまうことが今の私にははっきりとわかるが、とにかく簡単に街の様子を述べてみると、物は一時期に比べてはるかに出回

っており、それが買えるかどうかは別にして店にあるべき品物はほぼそろっている。もちろん肉類をはじめとするかなりの物は配給である。行列も日茶飯事ではあるが、日用品を手に入れるのに何時間も待つということはもうない。ポーランド人は日本に対する親近感と憧れはかなり強い（これは東欧全般にいえる）。日常生活は平穏ではあるが、何かもうひとつしっくりこないものを感じないでもない。人々の表情はややかたく、その心情はとても容易にはうかがい知ることはできないが、とにかく今はまず自分の目の前の生活を見つめて生きていくことだという感じが、たとえば教会のミサに参列している人々の様子から私にははした。ワルシャワの街全体の印象としては、近代的なビルディングや郊外団地の多さからいえば、ワルシャワは最も現代的な街である。それは戦後再建されたとは少なくともはじめのうちはとうてい信じられなかった旧市街の一角とは著しい対照をなしているが、同時にそれが、抜けるような8月の青空の下であったにもかかわらず、ワルシャワの街全体の私の印象を灰色がかった単調なものにしている。それだけに各テラスを彩る花壇と公園や歩道の樹々の緑には忘れたいものがある。そして、時間を問わず道ばたのベンチに腰をおろし思い思いの時間を過ごす人々を見てみると、彼らには少しのことではゆるぎることのない自分自身の時間とでもいったものが存在しているように私には思えてならなかった。

ワルシャワでの生活は、ブラハやブダペストのそれと比べて決して楽なものではない。それどころかしんどいものであるにちがいない。しかし、そうしたことを感じさせないだけのエネルギーをポーランド人はその中に秘めている。現在と過去が複雑に交錯し、閑レートがなかば公然化しているような二面性が随所に見られる街、地下道や駅が今回訪れた街の中で最も暗い街というように良きにつけ悪きにつけ“最も”という副詞を用いて語ることでできた街。そのようなすべてのことから対して、今回の1ヵ月に及ぶ滞在と他のヨーロッパの都市の訪問を通して、そして帰国後はより一層愛着をおぼえるのである。旅行途上で出会ったすべての人々、すべてのポーランド人の幸福を折らないではいられない。

1984年10月11日

ポーランド日誌
1984年8月28日～10月4日

8月28日 グダンスク協定4周年を目前にしてポーランド各地で非常態勢が。この日のラジオ・カトヴィツェによれば「街頭集会に参加、ピラを配布、等々のことをして公共の秩序を乱した者」に即決裁判を認められた原知事布告が制定されたという。「トリブナルド」ら政府系新聞が「J・リブスキの西独誌『シュビーゲル』論文に対する大々的非難キャンペーンを開始。

8月29日 レフ・ワレサ委員長、8月31日に読みあげる予定の宣言を西側記者に発表〔本誌10月号〕。ラコフスキ副首相はPAP通信とのインタビューで「『連帯』幹部はグダンスク協定を実施するつもりがなかった」と非難。この日伝えられたところによれば、Z・ブヤクが最近、A・ミフニク、J・クーロンと会談したという。

8月30日 Z・ブヤクがラジオ「連帯」を通じて演説、「連帯」に対する支持と全職場での組合組織の再建を呼びかける。グダンスク、グディニア、ヴロツワフ、シチェン等でグダンスク協定4周年の祝賀行事が始まる。カトヴィツェでは古参活動家K・シフトンがキリスト教系労働組合の認可を求めてハンストに入る。

8月31日 グダンスク協定4周年記念日。各地で祝賀行動〔本誌4頁以下を参照〕。

9月1日 ワレサ委員長、W・フラシニクとJ・ビニョルの逮捕を非難、「『連帯』はかつてなく強くなった」と31日の行動を評価し、政府に「連帯」との交渉を求め。この日からズウォチが10.6パーセント切り下げられ、1ドル＝132ズウォチとなる。

9月3日 ニュツカシ財政相は「利害得失を勘案しつつ」IMFおよび世界開発銀行への加入を検討中であることを明らかにする。

9月4日 ウルバン政府スポークスマンは記者会見で政治的反対派の国外追放罪の制定を検討中と語る。8月31日は昨年1昨年に比べ「きわめて平靜」で、逮捕者はゼロ、15人が軽罪裁判所で処理されただけという。

9月6日 「連帯」ほか各種労働組合指導者が8月31日に署名した組合複数制度を求める宣言が公表される〔本誌3頁を参照〕。マゾフシェ地区「連帯」結成4周年を記念して聖スタニスワフ教会でミサ、6000人～10000人が参列。この日Z・ブヤクが声明を発表、職場に「連帯」を再建しようと強い調子で呼びかける。「組合は今も存在するが、多くの職場で活動を止めてしまっている。多数の『連帯』刊行物が消滅し、解雇者の

防衛措置はほとんどとられていない。グダンスク協定4周年の日に加え、かつてあれほどたくさんの人が着けていた『連帯』バッジをつけている人はほとんどいなかった。われわれはそうありたいと望んでいるほど勇敢ではないのかもしれない……」。

9月7日 映画監督シチュトフ・ザヌーシが「静かな太陽の年」でヴェニス映画祭金賞を得る。

9月9日 レーガン大統領、ポーランド系米国人集会で発言、ヤルタ協定はソ連の東欧支配を認めたものではないと強調する。

9月11日 ソ連政府機関紙「イズヴェスチャ」が「連帯」を激しく非難、クーロン、ミフニク、ヤヴォルスキ、フラシニク、ブヤクらを「反ソ、反国家の過激派」と名指しで攻撃する。

9月12日 ポーランド国会の3名の代議士（E・オスマンチク、R・ライフ、J・ザブウォツキ）が政治的反対派の国外追放罪の計画に抗議する。

9月14日 ヨハネ・パウロ2世、トロントで約5万人のポーランド系カナダ人を前に演説、「連帯」は人間の尊厳のシンボルであると語る。

9月15日 J・パウビツキがポズナン地方検察庁から「公共の秩序と社会平和」を乱す行動の中止を求められる。

9月16日 カトリック系独立紙「ティゴドニク・ポフシェフヌイ」が政治的反対派の国外追放罪計画に強く反対する論文を発表。

9月18日 ウルバン政府スポークスマンは記者会見で政治的反対派の国外追放罪の検討状況を説明、法的、道徳的、人道的観点から反対があるのは事実だが、投獄よりも人道的だという意見もあると語る。この日新労組の綱領草案が発表される。「ゆがみのない社会主義が目標……、党と組合はパートナーの関係……」。

9月19日 W・フラシニクとJ・ビニョルの手紙が獄外に伝えられる。「監獄をまた満員にしても独立社会の抵抗は弱まらない」。

9月20日 ワレサ夫人によれば、先週水曜日、ワレサ委員長はJ・クーロンと会い、「長時間の有益な討論」を行ったという。

9月21日 この日ワルシャワから伝えられたところによれば、教会出資の農業基金設立に関する暫定合意が昨日成立、問題がなければ基金は数週後に正式登録のはこびという。この日バリエで刊行されているポーランド語誌「クルトゥーラ」およびロシア語誌「コンティネント」に発表された書簡で、Z・ロマシェフスキはサハロフ博士とエレナ夫人に対する抑圧に怒りを表明する。

9月22日 カトリック労働組合の認可を求めてハンストに入っていたK・シフトンがドンブロフスキ大司教の説得によりハンストを中止。この日の発表によれば、ポーランドの人口は3700万人、出生率はヨーロッパで、平均寿命は女75歳、男67歳という。

9月24日 グダンスクのワレサ委員長自宅にM・ユルチク、S・ヴォンドウォフスキら「連帯」幹部が集まり、今後の方針を協議。「問題の現実的解決を求めて新たな現実主義を示す」よう呼びかける。この日ウィーンで「数年ぶりに」ポーランド=オーストリア政府間合同経済協力会議が開かれる。

9月26日 ワルシャワ地区地下「連帯」幹部4人の共同声明。「市民的自由に関して政府の善意を期待してはならない。「連帯」支持の社会的圧力を強化すべきである。市民的権利は意志と勇気と自己組織化の力によってのみ獲得される。Z・ブヤク、K・ビュリンスキ、Z・ヤナス、W・クレルスキが署名。

9月27日 一般市民へのガソリン配給量の削減が発表される。ポーランド訪問中の日本国会議員団がヤルゼルスキ首相と会談。ヤルゼルスキ首相は信用による機械の購入など経済関係の強化を求める。

9月28日 オルショフスキ外相が国連総会で演説、「米国の経済制裁の解除と宣伝攻勢の中止」を要求。

9月30日 チェンストホヴァのヤスナグラ修道院における労働者巡礼式が終了、壁面に50本以上の「連帯」旗が残される。参加者は数千に達したが、教会側からは司教クラスは1人も参加せず。修道院副長のアダメク神父は「ここにおけるわれわれの力は祈りにあり、皆さん方のスローガンやVサイン、旗にはない」と語る。この巡礼式の間、「連帯」幹部、活動家多数が恩

赦後はじめて一堂に集まる。参加者はL・ワレサ、M・ユルチク、A・スウォヴィク、S・ヤヴォルスキ、A・グヴィアズダ、J・ルレフスキ、G・バルカ、Z・ロマシェフスキ、H・ヴェツ、A・ツェリンスキ、T・マゾヴィエツキ、J・オニシキエヴィチ、J・クロビツニツキ、A・ワレンティノヴィチ、K・シフトンら。議論の内容は発表されなかったが、現情勢が検討されたものと考えられている。

10月1日 ワレサ委員長はこの日発行のデンマークの日刊紙「ポリティケン」に寄せた論文で、ポーランド革命は平和的な非暴力的方法を通じてのみ成功すると述べ、力の議論よりも議論の力を用いるよう呼びかける。新学期の開始にあたりミスキエヴィチ高等教育相は、大学内の政治的反対派を許容しないと強い調子の声明を発表。

10月2日 ウルバン政府スポークスマンは外人記者会見で政府と教会の関係について触れ、近く行われる大司教と首相の会談は「一部の宗教的集会や場所が非宗教目的に使われるといった事実の断固たる排除によって」一層有意義なものとなろうと述べる。またウルバンは日本議員団のポーランド訪問や近く予定されているギリシャ首相やオーストリア、西ドイツ、イタリアの外相のポーランド訪問により米国のポーランド孤立化政策は破綻したと語る。

10月4日 ポーランドからの報道によれば、「連帯」幹部の1人、ピョートル・ベドナシュが腸管感染症のため重態に陥っているという。ベドナシュは84年5月バールチェヴォ監獄で胃を切って自殺をはかり、手術後の経過が思わしくないと伝えられていた。

[編：水谷 駿]

編集後記

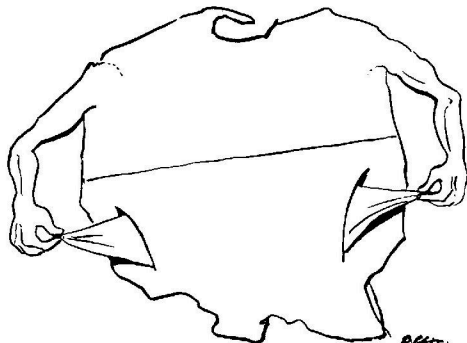
☆この夏ポーランドに行ってきた方々から寄稿いただきました。本誌84年5月号の工藤久代氏の見聞記「悲観をこえて」とはまた違った目で見た「連帯」4周年前後のポーランドの状況が実感できます。寄稿いただいた両氏にお礼申し上げます。

☆収録すべき記事の選択にはいつもいろいろの点で苦労しますが、とくに残念に思うのはスペースの制約のために長大な論文や資料の掲載が制約されることです。最近では、ポーランド国内のさまざまな地下出版物の政治的傾向を整理、分析した「ポーランド反対派の政治的地理について」（要約された英文でA4版13頁）や、1980年夏を準備する上で重要な役割を果たした70年代末の「飛ぶ大学」運動の組織者

の1人、W・バルトシェフスキのインタビュー（英文でA4版15頁——次の合併号で紹介を検討中）などがあります。「月報」には収録できないこうした長大な文庫はほかにも多数あります。タイトルと頁数を会員向けの『文庫資料サービス』各号で紹介していますので、興味ある方はぜひご利用下さい。

☆日誌からもうかがえるように、釈放された「連帯」幹部たちとワレサ委員長ら合法指導部、ブヤクら地下指導部との協議が進んでいるようです。また釈放された人々のインタビューや論文なども伝えられはじめています。スペースの許すかぎり、いろいろな人たちのこうした発言を紹介してゆきたいと考えます。

1984年10月13日 み



ポーランド地図から、よきり胸が出て、ポケットを
裏返しに引っ張り出す。「オレ」「文無しさ」

ポーランド日報・九五四年十一月分(通巻322) 一九八四年十一月五日発行
一九八四年十一月五日発行
「自由」(月刊) 一九八四年十一月五日発行
「自由」(月刊) 一九八四年十一月五日発行

'84年秋期開講!! マヤコフスキー学院

ロシア語

| コース | 開講 | 曜日 | 講師 |
|----------------|-------|----|----------------|
| 文芸・読物 基礎コース | 10/29 | 月 | 谷垣 恵子 桑野 子陸 |
| 中級読物 コース | 10/30 | 火 | 坂本 博春 浦雅 |
| ドストエ フスキー | 11/2 | 金 | 江川 卓良 鴻英 |
| プーシキン | 10/29 | 月 | 水野 忠夫 長 羅 光 |

ポーランド語

| コース | 開講 | 曜日 | 講師 |
|-------|-------|----|-------------------------|
| 会話コース | 10/30 | 火 | 米川ブランカ |
| 初級 | 11/2 | 金 | 進藤 照光 |
| 中級 | 11/2 | 金 | 小原 雅俊 石井 哲士朗 |
| 作品講読 | 11/1 | 木 | 丁藤 幸雄 武井 摩利一 篠崎 誠 |

- 授業開始/10月29日~11月2日 ●期間/6ヵ月
- 時間/PM 6:30~9:00 (会話コースのみ 6:30~8:30)
- 授業料/入学申込金5,000円ロシア語25,000 ポーランド語30,000円(会話コースのみ40,000円)
- 問合せ/中野区東中野1-41-5 TEL 362-8772 マヤコフスキー学院

発行所・ポーランド資料センター

Center for Polish Research

〒101 東京都千代田区三崎町2-10-5 一國ビル3F
電話 03-261-2585 郵便振替 東京 2-81069

3F 2-10-5 Misakicho Chiyoda-ku Tokyo 101

定価400円・年間定期購読料4600円(送料共)